



イスラエルの戦争——パート1 神のご加護

by アミール・ツアルファティ

14 わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る。わたしは、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる。このとき、あなたがたは、主であるわたしがこれを語り、これを成し遂げたことを知ろう。

——主の御告げ——

(エゼキエル書 37:14)

エルサレムより、シャローム。平和の町。しかし、戦争について語るには、地球上で最もふさわしい場所ではないでしょうか。この場所は、16回も破滅してきましたから。さらに聖書預言によれば、ここは最後であり、最終の戦場となるのです。

そこで、誰もが疑問に思うでしょう。

「何故、歴史が始まって以来、世界中でそれほどの人が、明確な理由もなしにこの国と、イスラエル人を破滅しようとするのだろうか？」

私が思うに、答えは他でもない、聖書の中に書かれています。詩篇の83篇に、その全ての答えが書かれているように見えます。

- 1 神よ。沈黙を続けしないでください。
黙っていないでください。
神よ。じっとしないでください。
- 2 今、あなたの敵どもが立ち騒ぎ、
あなたを憎む者どもが頭をもたげています。

(詩篇 83:1~2)

神の敵と神を憎む者たちが、何かをしようと企みますが、彼らは、生ける神、イスラエルの神と戦うことが出来ません。

- 3 彼らは、あなたの民に対して、
悪賢いはかりごとを巡らし、
あなたのかくまわれる者たちに
悪だくみをしています。
- 4 彼らは言っています。
「さあ、彼らの国を消し去って、
イスラエルの名が
もはや覚えられないようにしよう。」

(詩篇 83:3~4)

このように、戦いは神を憎む者、神の敵が神と戦おうとして、神の民、神のかくまわれる者に敵対してきます。イスラエルです。そして、彼らの明らかな目標は、イスラエルの国を消し去って、イスラエルの名がもはや覚えられないようにすることです。

世界中で、多くの人が思っています。

「パレスチナの、元々の名前は何なのか？」

「何故、聖書の中にも、また他のどの歴史書にも、2000年前には、その名が見当たらないのか？」

答えは、はるか、ユダヤ人によるローマに対する2度目の反乱（書記注:バルコクバの乱。AD132~135）の終わりにまで遡ります。皇帝エイドリアン（書記注:ハドリアヌス帝。在位 AD117~138）はユダヤ人を終わらせ、イスラエルの名がもはや覚えられないようにしようと決めた時、二つの事を決意しました。彼は、私の背後にあるこの町を完全に破壊し、その上にアエリア・カピトリナと呼ばれる、外国のローマの街を建てよう決めました。同時にエイドリアン帝は、この国全体の名を、彼らの古い敵、旧約聖書のペリシテにちなんで、シリア・パレスチナと変えたのです。

「シリアの地方パレスチナ」

その時、パレスチナと言う名が、初めてこの世に誕生しました。

そして、パレスチナという名はこの地にとどまり、西暦135年以降ここに住む人は皆、パレスチナ人と呼ばれました。ユダヤ人も、アラブ人も、クリスチャンも、その他の宗教の人も。皆パレスチナ人と呼ばれたのです。パレスチナ人という名は、どの集団のものでもなく、国の名前でもなく、統治国家の名前でもなく、地域の名前です。それは、たった一つの理由と、たった一つの目的のために付けられたのです。それは、イスラエルの名がもはや覚えられないようにするためです。まさに、詩篇83篇が告げている通りです。

近代史におけるイスラエルの戦争を見るには、第一次世界大戦の終わりまで遡らなければなりません。1517年から1917年までの約400年間、この地域を支配していたオスマン帝国が戦争に負けつつあり、帝国は終わりに差し掛かっていました。そして、イギリス、フランス、ロシアが集まって、その翌日のための解決策を探しました。しかしながら1917年、ロシアで共産主義革命が起こって、ロシアが外れ、イギリスとフランスだけが残りました。サー・マーク・サイクス（1879~1919 イギリスの中東専門家）と、ジョルジュ・ピコ外交官（1870~1951 フランスの外交官）、イギリスとフランスはそれぞれ案を作成し、1916年にイギリスとフランスでオスマン帝国の残りを分割することで合意、秘密協定を結びました。彼らは、オスマン帝国が第一次世界大戦の終わりには敗北すると確信していたのです。それが起こったとき、連合軍は現在のシリア・レバノン・イスラエル・パレスチナ・ヨルダン・イラクが独立国家を創設している間、イギリスとフランスが、彼らの帝国の一部として運営する権限を与えたのでした。1917年11月2日、イギリスの外務大臣サー・ジェームズ・バルフォアは、ロスチャイルド男爵に手紙を送りました。それは、大英帝国とアイルランドのシオン主義連合に宛てられたものでした。その手紙の中で、彼はこう書いています。

「親愛なるロスチャイルド卿、

私は、英国政府に代わり、以下のユダヤ人のシオニスト運動に共感する宣言が内閣に提案され、そして承認されたことを、喜びをもって貴殿に伝えます。

『英国政府は、ユダヤ人がパレスチナの地に国民的領土を樹立することにつき、好意をもって見ることとし、その目的の達成のために最大限の努力を払うものとする。ただし、これは、パレスチナに在住する非ユダヤ人の市民権、宗教的権利、及び他の諸国に住むユダヤ人が享受している諸権利と政治的地位を、害するものではないことが明白に了解されるものとする。』

貴殿によって、この宣言をシオニスト連盟にお伝え頂ければ、ありがたく思います。

敬具

アーサー・ジェイムズ・バルフォア」

バルフォア宣言は、ユダヤ人にとって歴史的にも、また彼らの故国、ここイスラエルの地の探求においても、重要な出来事でした。初めて、世界のこの地域を支配する帝国が、ユダヤ人の、彼らの故国に対する権利を認識したのです。これはとても異例なことでした。ユダヤ人が同情を受けたのは唯一、ナチス・ドイツによって600万人が殺された後だけでしたから。1917年、イギリスは、そろそろユダヤ人がイスラエルの地に自分たちの国を持つ時だと、理解していたのです。

【第二次世界大戦】

第二次世界大戦、ポーランドがドイツによって侵略され、その後の、ドイツへのフランスと大英国による宣戦布告で、我々の歴史上最も暗い、暗黒時代の一つが始まりました。

1939年後半から1941年初めまで、数々の軍事運動や条約によって、ドイツはヨーロッパ大陸の多くを制覇・支配して行き、イタリアと日本と共に、枢軸軍を組みました。モロト・フリッベントロップ協定で、ドイツとソビエト連邦は、ポーランド、フィンランド、そしてバルト海諸国を含むヨーロッパ近隣の彼らの領土の分割、併合を取り決めました。大英国とイギリス連邦は、北アフリカとアフリカの角で軍事行為を行い、同時に長期に渡った大西洋の戦いにおいても、唯一、枢軸軍と戦い続けた連合軍です。

1941年6月、ヨーロッパの枢軸軍勢がソビエト連邦侵略を仕掛け、史上最大の戦区を繰り広げました。それによって、枢軸軍の大部分が窮地に陥り、戦いは消耗戦となりました。そして、

1942年、日本がハワイ近くのミッドウェイ諸島の激戦で敗北、ドイツが北アフリカで敗北し、ソビエト連邦のスターリングラードで大敗北を喫した時、枢軸軍の進軍は停止しました。

1943年、東戦線でのドイツでの連敗、またイタリアの降伏と、連合軍に太平洋での勝利をもたらした、連合軍のイタリア侵略によって、枢軸軍は主導権を失い、全ての前線から戦略上撤退することに同意。

1944年、ソビエト連邦が失った全ての領土を奪還し、ドイツとその味方軍を侵略している間に、西連合軍はフランスに侵略。ドイツが西連合軍に侵略されて、ヨーロッパの戦いは終わり、そして、ソビエト連邦とポーランド軍によるベルリン占拠で最高潮に達します。

その後の1945年5月8日、ドイツは無条件降伏。

独立国家としてのイスラエル建国に先立って、ユダヤ人とアラブ人の間に、永続的、かつ包括的な平和をもたらそうとする動きは、歴史を通して何度も起こりました。というと、疑問に思う人もいるでしょう？

「それなら何故、今日の今日まで、そのような平和が成立していないだけでなく、イスラエルに対する憎悪がますます増して、強くなっているのか？」と。

イスラム原理主義者たちは、イスラムが世界を支配することがアッラーの意思であると信じています。彼らにとっては、ムハンマドの任務を成し遂げるように、とイスラムの法が明記しているのです。「全ての異教勢力は、戦いの場と見なせ」と。

作家のモリス・ファルヒは、トルコ生まれのイスラム教徒で、現在は英国在住、英国作家議会の副代表です。彼がその著書「The Last of Days」(時の終わり)の中で書いています。

「イスラム教徒は、ユダヤ人やクリスチャン、その他、イスラム教徒以外のいかなる者とも平和は無い、と信じている。もし、平和があるとすれば、唯一、真実が認められ、我々の剣に磨きをかけ、我々の血をそそり、我々の意思を強める為の便宜上、最高で10年だけである。イスラム原理主義者たちは、ユダヤ人を殲滅し、この国を支配しなければならない。さもなければ、ムハンマドは偽預言者となり、コーランは真実ではなくなる。」

全く考えられない思想です。だから、イスラム教徒は、彼らの預言者に忠実であるために、イスラエルを攻撃しなければならないのです。といっても、これが世界中のイスラム教徒の立ち位置ではありません。しかし、原理主義者、聖戦主義者たちはこの立場をとっており、残念ながら今日の今日まで、彼らの声が、他の全ての声をかき消しているのです。ある人は、アラブ人に味方することで、その戦いの中で、アラブ人が英国に味方するようになるだろうと考えますが、この場合はそうではありません。ユダヤ人住民は、第二次世界大戦中、英国軍のナチス・ドイツとの戦いに志願し戦いました。しかし、ここ、パレスチナと呼ばれていたイスラエルの地に住んでいたアラブ人たちは違いました。彼らはナチス・ドイツに味方しただけでなく、さらに協力したのです。

イスラム教法典解説者ハーッジ・アミン・アル＝フサニーは、アドルフ・ヒトラーに会うため、はるばるベルリンまで飛び、ドイツが勝利した際には、パレスチナの地のユダヤ人の存在に終止符を打つ内容の協議を、彼と交わしました。ナチスに協力しているものが、英国政策の恩恵を受け、その間に、英

国を助けているものが、実際どんどん苦しむことになるとは、考え難いことです。第二次世界大戦がはじまってすぐ、英国はアラブ人の独立国家を求める要求に屈服し、1939年、10年以内にアラブ人の独立国家設立を呼び掛ける白紙を発行しました。そして、その後5年間のユダヤ人のその地への移民を、わずか75,000人に制限しました。それによって、全てが終わりました。このような考えは、ホロコースト（ユダヤ人大虐殺）の間、多くの人の人生に影響を与えました。ユダヤ人にとっての故国、イスラエルの地、パレスチナへの入り口は、ナチスの脅威から逃れようとするユダヤ人に対して、閉ざされたのです。

またしても、アラブ人は、非常に寛大な申し出を拒絶したのです。まさに、我々の初代外務大臣アバ・エバンが、かつて言った通りです。

「パレスチナ人たちは、『機会を逃す機会』を絶対に逃さない。」

ホロコーストを生き残ったユダヤ人たちは、ついには平和を見つけられる故国への帰郷を望みました。子どもたちを育て、穏やかに暮らし、繁栄し、隣人に代わって、ではなく、彼らと隣り合って暮らす「平和」です。

残念ながら、ユダヤ人作家や詩人によって多くの歌、多くの物語に表現された、その平和への探求は、別の所で全く違う結果となりました。1947年、1948年のイスラエルとイスラエル人を破滅しようとする動きは、イスラエルによる占領地とは一切関係ありませんでした。当時イスラエルは、西岸地区も、ガザも、ゴラン高原も、その他、現在争いの原因であるとして主張されているこれらの場所は、まだどこも所有していませんでした。聖書には、詩篇120篇にこう書かれています。

1947年11月29日、国連が分割を発表したほぼ直後に、聖地で暴力が勃発。

5 ああ、哀れな私よ。メシエクに寄留し、ケダルの天幕で暮らすとは。

6 私は、久しく、平和を憎む者とともに住んでいた。

7 私は平和を——、私が話すと、彼らは戦いを望むのだ。

（詩篇120:5~7）

果たして、イスラエルの地、当時のパレスチナに、平和をもたらそうとした英国の努力は、こう着状態となって行き詰まり、彼らはそのバトンを、国連に渡す決意をします。

そして1946年、国連はついに解決策として、2つの民のための2つの国家という案を提示します。ユダヤ人にイスラエル。アラブ人にパレスチナ。

1947年11月29日、パレスチナのための案は、国連委員会によって草稿されました。それは、「分割案」として知られています。その案とは、基本的には国土全体をユダヤ人とアラブ人の間で分割し、エルサレムを国際都市として取り分けるというもので、その案の中で3分の2の不毛砂漠地帯がユダヤ人の手

に渡され、最も肥沃な地域ガリラヤがアラブ人の手に渡されることになっていました。それはユダヤ人には支持され、アラブ人には拒絶されました。またしても、アラブ人は非常に寛大な提示を逃したのです。この時は、英国だけでなく、国連全体が彼らに与えたのです。

1948年5月14日から15日に日付が変わる夜、英国は連邦旗を降ろし、中東にあるもの全てから手を引き、彼らに自分たちで解決させる決意をします。

その日、1948年5月14日の金曜日、イスラエルの地のユダヤ人社会の指導者ダヴィド・ベン=グリオンは、全ての分派、政党から指導者たちをテルアビブの博物館に召集しました。エルサレムが包囲されたためです。そこで彼は、イスラエルの独立宣言を読み上げました。その宣言とは、基本的に古く、聖書的で、神がこの地この国に与えた名前を元に戻す、というものでした。ダヴィド・ベン=グリオンは言いました。

「ここに、ユダヤ人国家建国を宣言する。それは、イスラエル国と呼ばれる。

詩篇 83 篇に書かれていることを思い出せば、我々の敵は、この国を滅ぼし、イスラエルの名がもはや覚えられないようにしよう、と躍起になっていました。この地に名前が戻り、その民が彼らの地に戻った事が、独立戦争勃発の主な理由です。我々には、歓喜し、路上で踊る時間は、5つのアラブ諸国がイスラエルの地に侵略するまでの、数時間しかありませんでした。生まれたての国は、その地とその民の存在を脅かす脅威にさらされます。ダヴィド・ベン=グリオンは、二つの選択肢から決断を下すのに、まさに数時間しかありませんでした。一つは「悪い」、もう一つは「もっと悪い」。悪い方の選択肢は、国家宣言し、直ちに起こる戦争に苦しむ。もっと悪い方は、国家宣言をせず、そしてただちに起こる戦争に苦しむ。ダヴィド・ベン=グリオンの決断は、「たとえ数時間であったとしても、国家は誕生しなければならない。」そして、それが預言者イザヤの言葉に息を吹き込みました。イザヤ書 66 章にはこうあります。

- 7 彼女は産みの苦しみをする前に産み、陣痛の起こる前に男の子を産み落としした。
- 8 だれが、このような事を聞き、だれが、これらの事を見たか。地は一日の陣痛で産みだされようか。国は一瞬にして生まれようか。ところがシオンは、陣痛を起こすと同時に子らを産んだのだ。
- 9 「わたしが産み出させるようにしながら、産ませないだろうか」と主は仰せられる。「わたしは産ませる者なのに、胎を閉ざすだろうか」とあなたの神は仰せられる。
- 10 エルサレムとともに喜べ。すべてこれを愛する者よ。これとともに楽しみ。すべてこれのために悲しむ者よ。これとともに喜び喜べ。

(イザヤ 66:7~10)

国は一気に誕生しました。そして国は一日の内に誕生しました。その国は、今では国旗や国歌を有するだけでなく、統治独立国家です。預言者イザヤの言葉は、こんにちでも多くの人の耳に鳴り響いており、ついにシオンは、その地とその子どもからなるイスラエルの国を生み出しました。

【独立戦争】

1947年11月29日、国連が分割を発表したほぼ直後に、聖地で暴力が勃発しました。戦いの第一局面は、1947年11月29日から1948年4月1日まで続きました。パレスチナのアラブ人たちは、近隣諸国の志願援助を受けて攻撃。ユダヤ人は多くの死者を出し、また、大通りの殆どが崩壊したため、苦しみました。1948年5月14日に、イスラエルは国家宣言しましたが、機械化した5つのアラブ軍が侵略し、ユダヤ人兵士はたったの35,000人。空軍もなく、訓練用の小さな飛行機があるのみで、パイロットがそこから手りゅう弾を落としました。その上、たった6台の戦車。エジプトの軍隊だけでも、40,000人の兵士に、戦車が135台、重砲、空軍にはスピットファイアや銃撃機を含む60機もの航空機がありました。ヨルダンには、英国の訓練を受けた48人のイギリス人士官と共に、イギリス人のサー・ジョン・ベケット率いるアラブ人部隊がありました。しかし、それら全ての不利な条件にも関わらず、ユダヤ人戦士たちは勝利し、多くの激戦は、壮大な奇跡的激突となったのです。例えば、1948年5月19日、エジプトの軍隊がテルアビブを乗っ取るための攻撃の一部として、地中海沿岸からキブツ、ヤドモルデハイに向かって攻撃を仕掛けました。一方は武装軍勢、もう一方は大砲隊軍勢という二つの歩兵軍勢が、130人が暮らすキブツを3時間で乗っ取るつもりでいました。戦火は何日も続き、ユダヤ人防衛隊は皆の想像よりもはるかに長く全エジプト軍を抑えました。武器は、ほとんど音ばかりの手作り品です。さらに彼らは、木で作った偽兵士を使って、塹壕から塹壕へと動かし、大軍勢に見せかけました。やがてエジプト軍は突破しましたが、予定からは既に何日も後れを取っており、彼らの士気はひどく動揺していました。その間、ヨルダン軍はエルサレム旧市街を完全に掌握しており、イスラエルは3度、ラトルンと呼ばれる地点から攻撃しましたが、成功には至りませんでした。エルサレムからテルアビブへの道は切断されたままで、もし古代ローマ街道が発見されていなければ、エルサレムは包囲に屈服するしかありませんでした。その道は、町の南部で曲がり、その後北に着くまでに西に曲がっていました。この道の素晴らしいところは、宗教的なユダヤ人が、アラブ人狙撃兵を避けて深夜更けてから通るためだけに使われていた点で、道の終点はデコボコ、穴だらけでガタガタでしたが、そこを通過して、トラックがエルサレムに入ることが可能となり、事実上包囲網を打ち破り、結果、エルサレムはこう着状態となりました。北部ではアラブ人たちが、辺りを見下ろすハル・カナンの上で野営し、そこはほぼ難攻不落の場所でした。彼らがそこにいる限り、ユダヤ人はサフェドへの道も町自体も支配することが出来ませんでした。それからイスラエルは、爆音を発するダヴィド迫撃砲を持ち込みました。それは非常に不正確で、戦術価値はあまりありませんでした。ある金曜日の午後、イスラエルは「ダヴィディカ」を数回発砲し、その時に奇跡が起こったのです。

雨です。

そこでは5~6月に雨は降らないため、アラブ軍はユダヤ人が核爆弾を使ったと確信しました。それ以外に雨を降らせるものなどないからです。その結果、彼らは難攻不落のハル・カナンの上から逃げ出しました。こうしてイスラエルはサフェドを占拠し、ガリラヤ地域北部全土からアラブ人を追い出しました。これらは、ほんのいくつかの例に過ぎず、神を信じるユダヤ人にとって、それは奇跡以外の何ものでもなく、ユダヤ人の歴史における、神の御手の直接的なしるしです。独立戦争が未だ起こっている中、イスラエルの戦争における生き残りは、まだ始まったばかりでした。

1949年に成された停戦によって、イスラエル周辺のアラブ諸国による、彼らの言う「イスラム界の中心のシオニストの実体」を終わらせる動きが終わることはありませんでした。先ほどお話しした通り、イス

ラム原理主義にとって異教徒の領土は、占拠しなければならないのです。特に、かつてイスラムが支配し、現在は彼らの支配下でない所なら、なおさらです。

1950年代、生まれたての国には、いくつかの課題がありました。課題とは、世界の四隅から自分たちの故国に戻ってくる、何十万人というユダヤ人移民の受け入れ、移民はアラブ諸国や北アフリカからも来ましたし、西ヨーロッパからも東ヨーロッパからも、また南北のアメリカからもやって来ました。イスラエルには対処すべき3つの課題がありました。彼らを物理的に故国へ連れ戻すこと、彼らが私たちの全員と意思の疎通をするための言語となるヘブル語、そして既に数年間ここに住んでいる人たちと彼らを完全に一致させること。

【シナイ運動】

1955年、エジプトの大統領ガマル・アブドゥル＝ナーセルは、イスラエルとの衝突に向けて、武器庫を建てる為、ソビエト圏からの武器輸入を始めました。しかしながら、短期間のうちに彼は、エジプト戦争によってイスラエルを迫害する新しい戦略を取り入れ、1955年8月31日にそれを発表しました。

「エジプトは、その英雄を送り込む。パロの弟子たち、イスラムの息子たちだ。彼らが、パレスチナの地を浄化するだろう。イスラエル国境に平和は無い。我々は復讐を命じ、復讐とは、イスラエルの死だ。」

これら殉教者軍団のヒーローたちは、おもにヨルダンにある基地から工作した為、ヨルダンは必然的に行われるイスラエルからの報復に耐えなければなりません。ティラン海峡のエジプト包囲軍との間は、どんどんエスカレートし、1956年7月、ナーセルはスエズ運河を国有化しました。10月14日、ナーセルはその意図を明確にしました。

「わたしは、イスラエルと単独で戦っているのではない。私の任務は、アラブ界をイスラエルの陰謀から救い出すことだ。その根は広く、我々の憎悪は非常に激しく、イスラエルと平和などあり得ない。交渉の余地すら、少しもない。」

それから2週間以内の10月25日、エジプトはシリア、ヨルダンと三者合意を結び、ナーセルを3つの軍全体の総司令官としました。イスラエルの運搬に対する、スエズ運河とアカバ湾の封鎖は続き、増大する攻撃も相まって、イスラエルは1956年10月29日、英国とフランスにエジプト攻撃の援護を求めました。1956年、戦争の決断がされた時、72時間以内に100,000人以上の兵士が動員され、空軍は43時間以内に完全稼働可能、空挺部隊はシナイに着陸、イスラエル軍は直ちに對向者のいないスエズ運河に向かって前進しました。英国とフランスの命令追従にもたつく前に、これら味方国は目的を果たすことには失敗しましたが、イスラエルはこの作戦がたったの100時間で行われ、自分たちの目的が達成されたことに満足していました。戦いの終わりには、イスラエルはガザ地区と、更には紅海沿いのシャルム・エル・シェイクまでを占拠。この戦いで、合計231名のイスラエル兵が死亡しました。その後、アメリカ合衆国は、ソビエト連邦のイスラエルを強制的に撤退させる軍事行動に参加しました。これは、アメリカによる支援の全面停止、国連制裁、国連からの除名も含まれました。アメリカからの圧力で、イス

ラエルはエジプトから一切特権を得ることなく、征服した航空域から撤退。これが1967年の戦いへ火種を残したのです。

1960年代は、別の前線での新しい脅威をもたらしました。今度はシリア政権側からでした。シリアは、ゴラン高原の下のイスラエル入植地を絶えず攻撃、それはほぼ毎日続きました。当時、その地域の防空壕で育った子どもたちの世代には、対立が起こるのは避けられないことでした。1964年、もう少しで争いが起こりそうになりました。シリアが、ダン川の水を迂回させ、自分たちの領土に流入させた結果です。イスラエルは、自分たちがシリアの政権と軍の支配層、最上層部に潜入しない事には、彼らの考えを理解しない事には、この脅威を打ち砕くことは出来ないと悟りました。そこから、エリ・コーエンの話へと繋がります。彼は、エジプトのアレキサンドリアで生まれ、20台でイスラエルに移住したユダヤ人の若者でした。コーエンはイスラエルの中央情報局に採用され、1961年から1965年の間、そのスパイ活動でよく知られました。まず、コーエンはアルゼンチンに派遣され、そこでビジネスマンとしての報告を始めました。コーエンは1962年2月に、“Kamel Amin Thaabet”の仮名でダマスカスへ移ります。そしてすぐに彼は、政治、軍の上層部と親しい関係を築き、シリア防衛相の主任顧問となったのです。数日間の無線封鎖の後、コーエンはイスラエル側へメッセージを送信している真ただ中に暴かれました。1965年、コーエンは戦前の戒厳令によって有罪とされ、死刑宣告を受けました。エリ・コーエンが集めた諜報は、1967年の6日間戦争でのイスラエルの成功における重要な要素だと言われています。

パート1 終わり

メッセージ by Amir Tsarfati/Behold Israel : <http://beholdisrael.org/>